

生成AI時代の特許調査：効率と「価値ある非効率」の探求

問題提起：「効率化」の追求がもたらす罠



特許調査は「手段」であり、「目的」ではない

課者の真の目的は、事業上の障壁を取り除く、競争の権利を無効化するなど、顧客の具体的な課題解決にある。

「効率化」が「手触り感」を奪う

AIによる自動化は、専門家が一件一件の技術や発明に触れ、思考錯誤する中で得られる貴重な感覚や経験を失わせる可能性がある。



間違った問いは、無用な答えしか生まない

そもそも解決すべき課題設定が間違っていれば、AIがどれだけ優れた答えを出しても無意味であり、かえって混乱を招く。



「自分たちがやりたいのは、仕事を効率的にこなすことだったのか？」

— Yoshio Kadobuchi

角田氏が効率化の先に抱いた疑問。拮据と向き合い、思考錯誤するプロセスそのものに価値があるのではないのか。

解決策：「価値ある非効率」の力

「泥臭い経験」こそが専門家の価値の源泉

一見無駄に見える非効率なプロセスが、AIには模倣できない直感や洞察力を育む。



事例：特許スクリーニングにおける「審美眼」

10件の重要特許を絞り込むには、数百件の「ノイズ(ゴミ)」文献を精査する必要がある。この非効率な作業が、良いものと悪いものを見分ける基準(審美眼)を形成する。

意図的に「非効率」を設計し、強さを育てる

自動化が進む時代だからこそ、教育や業務プロセスに取って手作業や思考を促す「非効率」な部分を残すことが、真のスキル習得につながる。

失敗経験が「野生の勘」を磨く

ベテランは多くの失敗経験から「何が問題か」を直感的に表知できる。AIによる自動化が停止した間、この泥臭い経験を持つ人材こそが輝く。

観点	従来の考え方(効率至上主義)	角田氏が価値する考え方(AIとの共存)
AIの役割	人間の作業を代替し、高速化する存在	人間の思考を拡張し、可能性を広げるパートナー
人間の価値	タスクの実行精度と正確性	課題の本質を見抜く「問いを立てる力」と「審美眼」
プロセス	非効率な部分を徹底的に排除	意図的に「非効率」を残し、経験と洞察力を育成
最終目標	業務の効率化	課題解決を通じたビジネスの成功と、人間の創造的発現

AI時代における人間の新たな役割

役割の転換：作業員から「問いを立てる者」へ

人間の最も重要なスキルは、課題の本質を責抜き、解決すべき「問い」を立て、磨き続けることである。



AIを「脳の拡張ツール」として活用する

自身の発言や思考をAIで整理、リシュリス、整理でき活版と務めに挑めることができる。

自身の発言や思考をAIに入力し、スライド化・文章化させることで、自分の考えを客観的に整理し、新たな気づきを得ることができる。



最終的な「責任」は人間が負う

AIは便利なツールだが、その出力の正しさを判断し、結果に対して責任を負うのは常に人間である。



「当たり前」を疑い、好奇心を持ち続ける

人間の恒久的な強みは、現状に疑問を持ち、切り替えたいと願う好奇心。これこそがAI時代を生き抜くための原動力となる。

